研究ノート
マタイの福音書2章15節における ホセア書11章1節の引用問題[1]

三浦　譲

I. 序

マタイは、イエスが幼児期にエジプトに立ちのき、再度エジプトから出て来てイスラエルの地に入るという出来事を記す際に、以下のようにホセア書 11 章 1 節を引用する。

マタイの福音書 2 章 14–15 節 [2]

14 そこで、ヨセフは立って、夜のうちに幼子とその母を連れてエジプトに立ちのき、

15 ヘロデが死ぬまでそこにいた。これは、主が預言者を通して、「わたしはエジプトから、わたしの子を呼び出した」と言われた事が成就するためであった。

---

[1] 本稿は、2016 年 8 月に行われた聖書宣教会聖書神学舎夏期研修講座において「新約聖書における旧約聖書引用の問題」として発表したものに加筆修正したものである。発表は、山﨑ランサム和彦「新約聖書における使徒的解釈学 —現代福音主義への示唆—」『福音主義神学』45（2014 年）33–54 頁に対する応答という形を取っている（近日、『聖書信仰とその諸問題』[仮題]として出版予定）。

[2] 本稿における聖書の日本語訳は、特筆しない限りにおいては新改訳聖書第 3 版による。

引用のことばは、ホセア書とマタイの福音書においてはそれぞれ以下のようになる。

ホセア書 11 章 1 節

MT

כִּי נַעַר יִשְׂרָאֵל וָאֹהֲבֵהוּ וּמִמִּצְרַיִם קָרָאתִי לִבְנִי׃

イスラエルが幼いころ、わたしは彼を愛し、わたしの子をエジプトから呼び出した。

LXX

Διότι νήπιος Ισραηλ καὶ ἐγὼ ἠγάπησα αὐτὸν
καὶ ἐξ Αἰγύπτου μετεκάλεσα τὰ τέκνα αὐτοῦ.

NETS[3]

For Israel was an infant, and I loved him,
and out of Egypt I recalled his children.

マタイの福音書 2 章 15 節

Ἐξ Αἰγύπτου ἐκάλεσα τὸν υἱόν μου.

わたしはエジプトから、わたしの子を呼び出した。

LXX は、MT の「わたしの子」を「彼の子たち」と変更する。たぶん、次節のホセア書 11 章 2 節で「彼らを呼べば」と、イスラエルが「彼ら」として三人称複数で描かれるゆえではないかと考えられる[4]。ゆえにこの引用に関しては、マタイは LXX というよりも、むしろ MT に沿って引用していると思われる。

それにしても、ホセア書 11 章 1 節におけるイスラエルの過去の出エジプトの出来事が、なぜマタイの福音書では「エジプトに入り、またそこから出てくる」というイエスの幼児期の出来事の成就となるのか。この箇所は新約聖書に

[3] すなわち、New English Translation of the Septuagint。

[4] G. L. Blomberg, "Matthew" in *Commentary on the New Testament Use of the Old Testament*, eds. G. K. Beale and D. A. Carson (Grand Rapids: Baker Academic/Nottingham: Apolos; 2007), 7.

おける旧約聖書引用理解の困難な一つの例として、これまでも幾度となく取り上げられてきた箇所である[5]。

当該箇所に関する比較的最近の G. K. Beale の小論文を参考にすると、当該箇所の引用理解に対するこれまでの先行研究を次のようにまとめることができるかと思われる[6]。

①マタイによる誤った解釈（e.g., D. M. Beegle; S. V. McCasland）
②ホセア書 11 章 1 節の「わたしの子」とマタイの福音書 2 章 15 節の「わたしの子」は同じ意味（W. C. Kaiser; cf. J. H. Sailhamer）[7]
③マタイに与えられたホセア書 11 章 1 節の「より完全な意味」（*Sensus Plenior*）としての特別な啓示（e.g., G. D. Fee and D. Stuart）
④当時行われていたユダヤ教の解釈（R. L. Longenecker; P. Enns）
⑤より広い旧約聖書の正典的文脈を考慮した上での、イスラエルの出エジプトとエジプトから帰還するイエスの予型論的理解（e.g., R. T. France; D. A. Carson）
⑥旧約聖書のテキストにおける意味からは離れたキリスト論的理解（P. Enns）

しかし近年、福音主義内において、当該箇所における引用問題に関する議論は単に上記のような引用理解の相違の問題に留まらない。そこで想定された結論から、使徒たちの解釈法の原則を導き出そうとする。後述するが、特に

[5] 例えば、W. C. Kaiser, Jr., *The Uses of the Old Testament in the New* (Chicago: Moody Press, 1985), 47-53; T. L. Howard, "The Use of Hosea in Matthew 2:15: An Alternative Solution," *BSac* 143 (1986), 314-328; J. H. Sailhamer, "HOSEA 11:1 AND MATTHEW 2:15" *WTJ* 63 (2001): 87-96; P. Enns, *Inspiration and Incarnation: Evangelicals and the Problem of the Old Testament* (Grand Rapids: Baker Academic, 2005; reprint, 2015), 122-124; W. C. Kaiser, Jr., D. L. Bock, P. Enns, *Three Views on the New Testament Use of the Old Testament*, eds. K. Berding and J. Lunde (Grand Rapids: Zondervan, 2008); G. K. Beale, "THE USE OF HOSEA 11:1 IN MATTHEW 2:15: ONE MORE TIME" *JETS* 55/4 (2012), 697-715; 山﨑ランサム「新約聖書における使徒的解釈学」33–54 頁。

[6] Beale, "THE USE OF HOSEA 11:1," 697-699.

[7] Beale は載せていないが、筆者の加筆による。

Peter Enns は、明確に「使徒たちの聖書解釈法はいわゆる歴史的・文法的解釈からは導かれない」と言う[8]。そして、その結論を最終的には我々の今日的な釈義方法の問題にまで発展させ、適用する[9]。ゆえに、Enns の主張などは、これまで「歴史的・文法的釈義」と呼ばれる方法論を用いてきた福音主義聖書学にとってのチャレンジとなる[10]。

「歴史的・文法的釈義」については、次のように定義される[11]。

> 「聖書テクストの原文（ギリシャ語・ヘブル語・アラム語）における分析とそれらのテクストが書かれた当時の文化的背景を考慮して、聖書記者がオリジナルの読者に伝達しようと意図した意味を読み取ろうとすることである。」

今回の問題を扱う際の「歴史的・文法的釈義」におけるポイントは次の二点かと思われる。一点はその前提にある聖書観で、聖書のテキストには著者が意図した唯一の意味が内在しているという点である。もう一点は先行テキスト（旧約）と後続テキスト（新約）の影響関係であり、「歴史的・文法的釈義」においてはその方向性は前者から後者に対してのみの一方向（prospective）とされ

[8] P. Enns, "Fuller Meaning, Single Goal: A Christotelic Approach to the New Testament Use of the Old in Its First-Century Interpretive Environment" in *Three Views on the New Testament Use of the Old Testament*, 174.

[9] その議論は山﨑ランサム「新約聖書における使徒的解釈学」においても展開される。

[10] 1978 年の「聖書の無誤性に関するシカゴ声明」（参考資料『聖書の無誤に関するシカゴ声明』「聖書神学舎通信特別号付録」[1979 年] 7 頁）においても、1987 年の日本プロテスタント聖書信仰同盟による「聖書の権威に関する宣言」（参考資料『聖書の権威に関する宣言』[日本プロテスタント聖書信仰同盟、1987 年]「日本の福音派」—21 世紀に向けて— [日本福音同盟、1989 年] 260 頁）においても、聖書の解釈法として「文法的・歴史的釈義」または「歴史的・文法的解釈」の必要性が明記される。

[11] 山﨑ランサム「新約聖書における使徒的解釈学」34 頁。Cf. W. C. Kaiser, *Toward an Exegetical Theology: Biblical Exegesis for Preaching and Teaching* (Grand Rapids: Baker, 1998).

るという点であろう[12]。このような「歴史的・文法的釈義」が、しかし Enns によって「使徒たちの聖書解釈法はいわゆる歴史的・文法的解釈からは導かれない」と言われる時、一体それは何を意味しているのか。

近年そのような議論が福音主義内に起こってきたゆえに、新約聖書における旧約聖書引用問題に関しても Counterpoints Series の一つとして Kenneth Berding and Jonathan Lunde 編集の *Three Views on the New Testament Use of the Old Testament* (Grand Rapids: Zondervan, 2008)（「新約聖書における旧約聖書引用に対する三つの見解」）が出版されている。本稿はその書に収められている三つの立場を紹介した上で、マタイの福音書 2 章におけるホセア書 11 章 1 節の引用に対する現時点での筆者なりの立場とその理解を示すこととする。

II. 福音主義内の「新約聖書における旧約聖書引用」の議論

ここでは上述した *Three Views on the New Testament Use of the Old Testament*（「新約聖書における旧約聖書引用に対する三つの見解」）を紹介し、新約聖書における旧約聖書引用に対するそれぞれの主張をまとめることとする。

本書は、まず序論で、この分野で問題となる五つのポイントを以下のように挙げた上で、三人の立場を載せる[13]。

①新約聖書における旧約聖書使用を説明するにあたって *sensus plenior*（「より完全な意味」）は適切か？
②*Typology*（予型論）はどのように理解されるべきか？
③新約聖書著者は旧約聖書を引用する際にその「文脈」を考慮しているか？
④新約聖書著者は旧約聖書を引用する際に当時のユダヤ的釈義方法を用い

[12] 山﨑ランサム「新約聖書における使徒的解釈学」34–36 頁参照。

[13] J. Lunde, "An Introduction to Central Questions in the New Testament Use of the Old Testament," in *Three Views on the New Testament Use of the Old Testament*, 7-41.

ているのか？

⑤新約聖書に見られるような旧約聖書への釈義的・解釈的アプローチを我々は模倣することができるのか？

本書の議論のすべてを挙げることはできないが、（1）三人の主な主張とともに、特に（2）三人がマタイの福音書2章におけるホセア書11章1節の引用をどのように理解したのかの二点をまとめていくこととする。

本書で紹介される三人の順番は Walter C. Kaiser Jr., Darrell L. Bock, Peter Enns であるが、Kaiser と Enns の立場が福音主義内でも両極端な立場にあると思われるため、まずはこの二人を紹介し、最後に二人の中間に位置するような立場にある Bock を取り上げることとする。

1. Walter C. Kaiser, Jr.

Kaiser の付けるタイトルは、"Single Meaning, Unified Referents: Accurate and Authoritative Citations of the Old Testament by the New Testament" である[14]。

（1）新約聖書著者による旧約聖書引用

Kaiser は旧約聖書著者の意図した意味と新約聖書著者の意図した意味が同じだと言う。ゆえに、そのタイトルを "Single Meaning, Unified Referents" と付ける。つまりは、やがての預言の成就の出来事に対しては旧約聖書著者はそれを完全に理解していたということになる[15]。そのような解釈はこの後のマタイの福音書2章におけるホセア書11章1節の引用に対する Kaiser の理解において明確となる。言語のルールと釈義によって見つけることができる意味は一つのものであって、その意味は変わることがない。ゆえに、Kaiser は決して *sensus*

[14] タイトルの日本語訳：「一つの意味、同一の指示対象：新約聖書における旧約聖書の正確かつ権威ある引用」。

[15] D. L. Bock, "Response to Kaiser" in *Three Views on the New Testament Use of the Old Testament*, 93.

plenior（「より完全な意味」）を受け入れることをしない[16]。また、聖書の中に予型というものを認めつつも、キリストの光に照らしてはじめて旧約聖書のことばが預言的に「なる」といった retrospective（後続テキスト→先行テキスト）な方向性を持つ予型論に対しては否定する[17]。

つまりは、Enns が「使徒たちの聖書解釈法はいわゆる歴史的・文法的解釈からは導かれない」と言う時、もしかすればまずは主に Kaiser のような立場を前提としての主張であったのかもしれないと想像される。

（2）マタイの福音書2章15節におけるホセア書11章1節の引用理解

マタイは、イエスの家族がエジプトから出た時というよりもエジプトへ入った時に、ホセア書11章1節を引用する（マタイ 2:15）。ゆえに、ここでパラレルになっているのはエジプトからのイスラエルの帰還とイエスの帰還ということではなく、むしろ「わたしは……『わたしの子』を呼び出した」に焦点がある、とする。この「子」という用法は出エジプト記4章22節に端を発するが、それはイスラエルを指す集合名詞である。しかし、ホセアがここで「わたしの子」と言う時、その集合名詞的な「イスラエル」を指しながらも、それはまた約束の子メシヤをも指した。すでにサムエル記第二7章14節; 詩篇2篇7節; 89篇27節; 箴言30章4節にそのような「子」の概念が見られるからである。つまりは、「神が出エジプトにおいて『わたしの子』であるイスラエルを救い出した」と言う時、その中にはやがてのメシヤの先祖も含まれている。このようにホセア書11章1節でホセアが語る意味とマタイの福音書2章15節でマタイが語る「子」の意味は全く一つで同じものだと言う[18]。

[16] W. C. Kaiser, Jr., "Single Meaning, Unified Referents: Accurate and Authoritative Citations of the Old Testament by the New Testament" in *Three Views on the New Testament Use of the Old Testament*, 49-50; K. Berding, "An Analysis of Three Views on the New Testament Use of the Old Testament," in *Three Views on the New Testament Use of the Old Testament*, 234.

[17] Kaiser, "Single Meaning," 61.

[18] W. C. Kaiser, Jr., "Response to Enns" in *Three Views on the New Testament Use of the Old Testament*, 222-223. Kaiser のマタイの福音書2章15節におけるホセア11章1節

しかし、このような Kaiser の理解が、特に Enns の立場から批判されることとなる[19]。

2. Peter Enns

Enns の付けるタイトルは、"Fuller Meaning, Single Goal: A Christotelic Approach to the New Testament Use of the Old in Its First-Century Interpretive Environment" である[20]。

（1）新約聖書著者による旧約聖書引用理解

Enns は、使徒たちの聖書解釈法は当時のユダヤ的解釈法の範疇にあったと述べつつ、明確に「使徒たちの聖書解釈法はいわゆる歴史的・文法的解釈からは導かれない」と言う[21]。つまり、それは、旧約聖書のことばのその文脈における意味と新約聖書著者がそのことばをいかに使用したかの間には「断続 (disconnect) がある」ということを意味する[22]。新約聖書著者が旧約聖書のことばを引用した際に旧約聖書のオリジナルの文脈における意味は保持されていないと言う[23]。だから、彼はタイトルに "One meaning" とは付けずに、"Fuller

の引用理解については、*The Uses of the Old Testament in the New* (Chicago: Moody Press, 1985), 43-53 にも見られる。

[19] 山﨑ランサム（「新約聖書における使徒的解釈学」48 頁、注 35）は、次のように言う。「ホセア書 11 章 1 節がユダヤ教の中でメシア的に解釈された例がないという事実からして、このような解釈は到底誰もが思いつく自然な解釈であったとは考えられない。」

[20] タイトルの日本語訳：「より広がりのある意味、一つの目的：1 世紀の解釈的環境における新約聖書の旧約聖書使用に対するキリスト目的的アプローチ」。特に Enns に関しては、上記の書以外にも彼の著書 *Inspiration and Incarnation: Evangelicals and the Problem of the Old Testament*, Second edition (Grand Rapids: Baker Academic, 2015) に同様の議論が載っている。

[21] Enns, "Fuller Meaning," 174.

[22] Ibid.

[23] Enns, *Inspiration and Incarnation*, 105.

Meaning" と付けるのだろうと思われる。

同時に Enns は、使徒たちの聖書解釈法には当時のユダヤ的解釈法とは異なる点も存在し、それが「イエス・キリストこそが神とイスラエルの間における契約のクライマックスである」という点だと言う。つまり、新約聖書著者たちは旧約聖書テキストを一つの文脈、つまりは一つのイスラエルのオリジナルの歴史的過去の文脈から取り出し、そしてそれを別の文脈、つまりはイスラエルの物語が最終的なゴールに向かう文脈に置き換えたのだと言う[24]。Enns はこれを「キリスト目的的 (Christotelic)」解釈と呼び、「キリストが旧約聖書の終わりであるということをすでに知った読み方である」と言う。Enns によれば、旧約聖書の細部にまでキリストを読み取ろうとする「キリスト中心的 (Christocentric)」解釈、または「キリスト論的 (Christological)」解釈とは区別して、この「キリスト目的的 (Christotelic)」解釈を提唱するのだと言う[25]。

これを児玉剛は「旧約聖書は復活した主イエス・キリストという視点から再解釈されるべき」解釈と説明する[26]。つまりは、旧約聖書の著者としての人間の意図と、それとは「別」の神の意図が存在することを前提としており、このことゆえに Enns はその解釈法を単に *sensus plenior* とか typology と呼ばれることに満足しない。例えばマタイの福音書 2 章におけるホセア書 11 章 1 節の引用を例にして、Enns は次のように言う。

> 「マタイがホセア書 11 章を引用する時、そのホセア書 11 章にはより広い意味と予型論的な意味の両方が暗示されている。しかしながら、イスラエルとキリストを同一視するということはホセア書の読み『から』出てきたものではなく、マタイが回顧的（後続テキスト→先行テキスト）に[27]、イエスの生涯における深い神学的重要性を理解した時、つまり『時が満

[24] Ibid., 142.

[25] Ibid., 143.

[26] 児玉剛「聖書論と組織神学」『聖書信仰とその諸問題』（仮題；2016 年聖書宣教会聖書神学舎夏期研修講座）。

[27] 括弧内は筆者の加筆による。

ちた』時においてのみ理解されたのである。」[28]

やはり Enns にとっては、上述したように、旧約聖書の著者としての人間の意図とそれとは「別の」神の意図が存在するという点は重要なポイントであり、旧約聖書を復活のキリストという視点から再解釈するというものが使徒的解釈だと言うのである。

（2）マタイの福音書２章 15 節におけるホセア書 11 章 1 節の引用理解

Enns は、ホセア書 11 章 1 節でホセアは少年イエスのことを、また将来のメシヤを預言的に語っているのではないと言う。ホセア書は将来ではなく、「神が愛した子であるイスラエルをエジプトから呼び出した」と、単にイスラエルの過去の歴史を語っている[29]。しかしマタイは、ホセア自身のことばを取り出してくるというよりもそれをキリストの来臨という光の中で読む。

けれども、Enns は他の学者たちの解釈を排除しない。例えば、やはりマタイはホセア書のより大きな文脈を考慮し、ホセア書における「子」とマタイの福音書における「子」は比較できるのだとする。つまり、ホセア書に登場する不従順で、罰を受けるべき、しかし神に赦された（ホセア 11:8–11）若き「イスラエル」と、マタイの福音書に登場する全き従順に生き、罰を受ける必要のない、しかし十字架につけられた少年「キリスト」が対比されていると言う。そのような対比を行いながら、マタイは、イスラエルがなすべきであったがなし得なかった理想的な姿をイエスが成就した。イエスこそが真のイスラエルで真の神の子なのだと論じているのだと言う[30]。つまり、これは Beale も指摘するように、ホセア書のより大きな文脈を考慮した上での予型論的な理解に近いと言える[31]。

しかし、それでも他の学者たちの解釈と違う点は、すでに述べたように、マ

[28] Enns, “Fuller Meaning,” 208.
[29] Ibid.,199.
[30] Ibid., 200; idem., *Inspiration and Incarnation*, 123-124.
[31] Beale, “THE USE OF HOSEA 11:1,” 710, n. 42.

タイはこの結論をホセア書「から」導き出したのではなく、ホセア書をこのような新しい視点で読むように導かれたのは復活のキリストのリアリティーだと言う点である。

３．Darrell L. Bock

Bock の付けるタイトルは、“Single Meaning, Multiple Contexts and Referents: The New Testament’s Legitimate, Accurate, and Multifaceted Use of the Old” である[32]。

（1）新約聖書著者による旧約聖書引用

そのタイトルに “Single Meaning” と付くことによって、Bock の立場はもちろん Enns の立場とは異なるということがわかる。Kaiser とは類似点もあれば相違点もある。類似点は、Bock が新約聖書著者に表された旧約聖書のことばの意味は旧約聖書のオリジナルな意味と切り離されたものではないと考えている点である[33]。それゆえに “Single Meaning” というタイトルが付く。

しかし Kaiser と異なるのは次のように主張する点である。旧約聖書著者が神に示されたことを記す時、彼らはその書くすべてを完全に理解したのではなかった。それはペテロの手紙第一 1 章 10–12 節や ダニエル書 12 章 5–13 節が示すとおりである[34]。つまり、人間の著者がことばに著す時にそのすべてを理解していなかったとしても、聖書の究極的な著者である神が意図したものは「より完全な意味（*sensus plenior*）」であった。ゆえに、神は最終的に、一つの文脈における対象だけではなく、いくつかの時間枠を越えた文脈における対象を示すことができるのだと言う。そして、それが歴史における予型論的パター

[32] タイトルの日本語訳：「一つの意味、多様な文脈と指示対象：新約聖書における旧約聖書の正当的、正確的かつ多面的使用」。
[33] D. L. Bock, “Response to Kaiser” in *Three Views on the New Testament Use of the Old Testament*, 91; idem., “Single Meaning,” 112.
[34] Bock, “Response to Kaiser,” 93.

ンの存在ゆえに可能になると言う[35]。ゆえに、議論のタイトルに“Single Meaning, Multiple Contexts and Referents”と付く。

そのような意味においては、Bock は *sensus plenior* を全く否定することはしない。そもそも *sensus plenior* という理解は Raymond Brown による次のような定義が発端として議論がなされてきた。

> 「*Sensus plenior* とは、人間の著者によって明確には意図されていないが、神によって意図された付加的（additional）でより深い（deeper）意味を指す。それは、後のさらなる啓示や啓示の理解の進展の観点から学んだ時に、聖書のテキストのことば（もしくはテキストの一群、また一書全体においてさえ）に見られるものである。」[36]

しかし、現在もその定義は曖昧で、ある者たちはこの定義に満足しない。Bock は著者としての人間の意図と神の意図の「違い」を説明する目的で使う *sensus plenior* ではなく、あくまでも著者としての人間が語ったことと神が彼を通してさらに語ることには、人間としての著者がオリジナルなセッティングにおいて語ったという意味において「関連がある」と考える[37]。そのような意味においては Enns も Bock も大きな定義における *sensus plenior* の概念の中に含まれる。しかし、その際の留意点はその定義の仕方である。Bock の考えるような *sensus plenior* の理解に対しては Douglas J. Moo など他の福音主義者たちからも支持を得る[38]。神は歴史を通してその計画を徐々に明らかにされる。つまり、神の計画が表された先のテキストにおける意味は、後の出来事とテキストにおいてそれがさらに明瞭になるのである。

そのようなことを理解するためには、Bock は、テキストの歴史的・釈義的

[35] Ibid., 113-119.
[36] R. Brown, *The Sensus Plenior of Sacred Scripture* (Baltimore: St. Mary's University Press, 1055, reprinted 1960), 92, cited by Lunde, “An Introduction,” 14.
[37] Bock, “Response to Kaiser,” 91; idem., “Single Meaning,” 113.
[38] D. J. Moo, “The Problem of Sensus Plenior,” in eds., D. A. Carson and J. D. Woodbridge, *Hermeneutics, Authority, and Canon* (Grand Rapids: Academic Books, 1986), 201-204.

読み方（“historical-exegetical reading”）とともに、神学的・正典的読み方（“theological-canonical reading”）が必要であると言う。前者はオリジナルなセッティングにおける著者の意図を明らかにしようとするものであり、後者は次の、後の啓示という光の中でテキストを読もうとするものである。しかし、Bock は同時に、釈義とは神学的でもあるし、神学は釈義的でもあると言う[39]。これは新約聖書における旧約聖書引用を理解する際にも上記の二つのアプローチは実は自然なものなのであり、このことによって単に先行テキストから後続テキストへの prospective な方向性だけではなく、逆の retrospective（後続テキスト→先行テキスト）な方向性による理解も必要であることを意味しているように思われる。

（2）マタイの福音書２章 15 節におけるホセア書 11 章 1 節の引用理解

非常に簡単な説明しか示さないが、この引用の場合も Bock は予型論的に考察する。ホセア書 11 章は 1 節において過去の出来事を語っているが、8–11 節にはイスラエルへの将来の約束を含む。終わりにおける救いが最初の救いと類似しているという神学的パターンをホセア書とマタイの福音書に見ることができると言うのである[40]。

4．留意点

以上三人の立場を見て、二点に留意する。

（1）Kaiser の立場と Enns の立場の両極端

Kaiser の立場と Enns の立場の違いは明白である。Kaiser にとって旧約聖書著者の意図した意味は文法的・歴史的釈義からのみ得られる一つの意味であっ

[39] Bock, “Single Meaning,” 115-116.
[40] Ibid., 119-120. Bock, “Response to Enns” in *Three Views on the New Testament Use of the Old Testament*, 230-231.

て、それは新約聖書に引用されたとしてもより深い意味を表すことはない。そして、その方向性は prospective（先行テキスト→後続テキスト）な一方向性のみである。ところが Enns にとっては旧約聖書における意味と新約聖書で引用された時の意味は「別」のものであって、そこに連続性はない。むしろ、retrospective（後続テキスト→先行テキスト）にのみ旧約聖書が復活のキリストという視点で再解釈されると言ってもいい。ゆえに、Enns が「使徒たちに見られる聖書解釈法はいわゆる歴史的・文法的解釈からは導かれない」と言う時、まずは特に Kaiser のような立場を想定してのことなのではないかと思われる。

Kaiser のマタイの福音書 2 章におけるホセア書 11 章 1 節の引用理解に対しては、特に Enns の立場から批判されるが[41]、確かにこの箇所に関する Kaiser の解釈には困難さが伴うように思われる。まずは、マタイがイエスの家族がエジプトから出た時というよりもエジプトへ入った時にホセア書 11 章 1 節を引用する（マタイ 2:15）ため、ここでのパラレルはイスラエルとイエスのエジプトからの帰還というよりも、「わたしの子を呼び出した」の「わたしの子」に焦点があると言う。そこから「子」という用法に集中することとなり、集合的なイスラエルという「子」と同時にメシヤとしての「子」がそこに含まれているのだと言う。けれども、「ヘロデが死ぬまでそこにいた」（マタイ 2:15）によって、やはりエジプトからの帰還が前提とされているのは明らかであろう[42]。また、マタイの福音書 2 章における旧約聖書引用は、すべてではないにしても特に地名に関心を示しているのではないか（ベツレヘム［6 節］；エジプト[15 節]；ナザレ［23 節]）と思われる[43]。そしてマタイの福音書 2 章 15 節では、「わたしの子」と同時に「エジプトから」という表現も強調されている。つまり、「エジプトからの帰還」、つまりは「出エジプト」というパターンにおいてイスラエルとイエスに一つの類似したパターンが見られると理解した方がよいと思われる。

しかし、Enns の理解はさらに大きな問題を含んでいるように思われる。

[41] 本稿脚注 19 参照。
[42] Cf. Beale, “THE USE OF HOSEA 11:1,” 706.
[43] Cf. ibid.

「使徒たちの聖書解釈法はいわゆる歴史的・文法的解釈からは導かれない」と述べる Enns は、その結論を最終的には我々の今日的な釈義方法の問題にまで発展させ、適用する。しかしその際に、使徒たちの解釈法というよりは彼らの解釈学的態度に倣うことができると言う[44]。Richard N. Longenecker が新約聖書著者の「方法」の違いに留意して、「彼らが旧約聖書を歴史的・文法的方法で解釈している部分には我々も従えるが、そうでない部分には従えない」と述べるのとは違って[45]、Enns は釈義的「方法」のうちに従えるものと従えないものの区別をするのではなく、それは「解釈学的目的」か「釈義的方法」の違いであるのだと言う。使徒たちの第二神殿時代の釈義的方法ではなく彼らのキリスト目的的解釈という解釈学的目的を真似ることができるのだと言う。それを Enns は「解釈学的態度」と言うのであろう。

しかし、Enns が語るキリスト目的的解釈のうちに、旧約聖書のオリジナルなセッティングにおける意味と新約聖書著者が引用する場合の意味との間の不連続性がある点には留意する必要がある[46]。やはり、最近台頭してきた読み手中心の聖書の読み方にも通じるのではないかと思われる。その態度に倣うとは、聖書のテキストがオリジナルなセッティングにおいて持つ意味がいかなるものであろうとも、そのオリジナルな意味とは「別」の読み手としての我々、つまりは自分の視点（意図）からテキストを再解釈するという危険性を大いにはらんでいることとなる。しかし、まずはテキストに表された聖書著者がオリジナルに投げかける意味を聴き、それを我々が理解するというプロセス、たとえそれが一見困難なように見えても忍耐を持ってそこに聴き続けることは不可欠なことだと言えるだろう。

[44] Enns, “Fuller Meaning” 217; idem., 147-148.
[45] Enns, *Inspiration and Incarnation*, 147-148. 山﨑ランサム「新約聖書における使徒的解釈学」49–50 頁参照。
[46] 本稿においては指摘することができなかったが、Enns の語るキリスト目的的解釈がそもそも聖書内の矛盾と思われる点を克服しようとするところから発しているように思えることにも留意する必要がある（Enns, *Inspiration and Incarnation* を参考のこと。また、児玉「聖書論と組織神学」を参考のこと）。旧約聖書著者が語る意味、そしてその歴史的事実性を受け止める必要がある。

（2）予型論的解釈の必要性

マタイの福音書 2 章におけるホセア書 11 章 1 節の引用理解に対しては、筆者は予型論的解釈が必要なのではないかと考える。上記のように Kaiser の立場の理解に困難が伴うとしても、旧約聖書の著者としての人間の意図とは「別」の神の意図が存在することを前提とする Enns の立場を受け入れる必要はないと思われる。

本稿の「序」において、今回の問題を扱う際の「歴史的・文法的釈義」における二つのポイントは、（1）聖書のテキストには著者が意図した唯一の意味が内在しているという聖書観の前提と、（2）新約聖書における旧約聖書引用などで考えられる先行テキストと後続テキストの影響関係、であると述べた。

第一点目に関して言及するならば、Kaiser のみならず、Bock の立場をも適用することができる。Bock は、旧約聖書著者の意図と新約聖書著者の意図に「一つの意味」という連続性を認めながらも、聖書の究極的な著者である神は最終的に一つの文脈における対象だけではなく、いくつかの時間枠を越えた文脈における対象を示されると考える。神は歴史を通して先のテキストに表された計画を徐々に明らかにされ、後の出来事とテキストにおいてそれをさらに明瞭にされる。

そして、第二点目に関しても Bock の立場を適用することができると筆者は考える。Enns によるこれまでの福音主義聖書学に対するチャレンジは、旧約テキストにおける著者の意図した唯一の意味が一方向的（prospective）に新約記者に伝えられるとする歴史的・文法的釈義法に対するチャレンジと言っていいかもしれない。そのチャレンジする相手が Kaiser のような *sensus plenior*（「より完全な意味」）を全く認めないような立場を想定してのことなのかもしれないが、ここでも Bock の立場を考慮する必要があるように思える。

この度のマタイの福音書 2 章におけるホセア書 11 章 1 節の引用問題に対しては、これまでも福音主義内においては予型論的な理解、そしてホセア書の大きな文脈における考察的な理解が大半をなしてきた[47]。予型論的解釈には新約

[47] 例えば、G. L. Blomberg, “Matthew” in *Commentary on the New Testament Use of the*

テキストから旧約テキストという retrospective な方向性が含まれる。しかし筆者は、これまでも福音主義における多くの者たちは予型論的解釈をも考慮しつつ従来の歴史的・文法的釈義を踏襲してきたのではないかと思う。つまりは、新約聖書における旧約聖書引用を理解する際に、単に先行テキストから後続テキストへの一方向的な prospective な方向性だけではなく、逆の retrospective（後続テキスト→先行テキスト）な方向性による理解が必要であるということである。そのようなことを意識してか、Bock は「テキストの歴史的・釈義的読み方（“historical-exegetical reading”）とともに、神学的・正典的読み方（“theological-canonical reading”）が必要である」と言う。次項で扱う Beale も同様に、「文法的・歴史的アプローチと同時に聖書的・神学的アプローチ（“biblical-theological approach”）が必要である」と言う[48]。

筆者のポイントは、福音主義における多くの者たちは従来から例えばマタイの福音書 2 章におけるホセア書 11 章 1 節のような引用問題に対しても、そのような前提で理解してきたのではないかという点である。そのような、より大きな文脈理解を考慮しての予型論的理解をしなければ、例えば新約聖書における詩篇引用などは理解できないことになるのではないかと思われる[49]。近年、特に新約聖書における旧約聖書引用理解が一見困難と思える場合、すぐにそれを pesher（ペシェル）などのユダヤ教的解釈に倣うものだとして片付ける傾向がある。例えば、使徒の働きにおける詩篇引用に対しても、注解者たちは 1 章 20 節を typology、2 章 25–28 節を直接的な預言、4 章 25–26 節を pesher と見る向きがある。けれども初代クリスチャンたちの理解には詩篇引用に対して一貫性がなかったのか。いや、それはもっと一貫性のある理解の仕方であったのではなかったのかと筆者は考える[50]。特に旧約聖書引用理解が一見困難に見えて

Old Testament, eds. G. K. Beale and D. A. Carson (Grand Rapids: Baker Academic/Nottingham; Apolos; 2007), 8; R. T. フランス『マタイの福音書』（ティンデル聖書注解；いのちのことば社、2011 年）106 頁。山﨑「新約聖書における使徒的解釈学」41 頁参照。

[48] Bock, “Single Meaning, 115-116; Beale, “THE USE OF HOSEA 11:1,”, 700.

[49] Y. Miura, *David in Luke-Acts: His Portrayal in the Light of Early Judaism* (WUNT II/232; Tübingen: Morh Siebeck, 2007) を参考のこと。

[50] 同掲書を参考のこと。

も、すぐにそれをユダヤ教的解釈法として片付けずに、あきらめずに、その理解のために予型論的理解をも含めた歴史的・文法的釈義に沿って検討努力する必要を怠ってはならないのではないかと思う。

しかし、それにしても、たとえアプローチが違ったとしても、Enns が当該箇所において最終的に示す解釈がホセア書の大きな文脈を考慮しての予型論的な理解と何ら変わることがないというのにも驚く。しかしそうだとすると、この箇所は何も Enns の語るキリスト目的的アプローチでなくても、単に予型論的なアプローチで十分に理解できるのではないかと思える。Enns の方法論こそ見直されるべきなのではないかと考える。

III. マタイの福音書 2 章 15 節におけるホセア書 11 章 1 節の引用理解
—G. K. Beale の理解を参考にして—

上述したような新約聖書における旧約聖書引用に対する三つの見解の観点で言うならば、筆者の立場は Bock の立場に近い。

では、予型論的な解釈をも加えての歴史的・文法的釈義に従うならば、マタイの福音書 2 章 15 節におけるホセア書 11 章 1 節はいかに説明されるのか。ここでは、筆者が知る限り当該箇所に対する最新の小論文だと思われる Beale の示唆するものを簡潔に紹介する。当該箇所において、「文法的・歴史的アプローチと同時に聖書的・神学的アプローチ（“biblical-theological approach”）が必要である」と述べる Beale は、旧約聖書のより広い文脈を考慮しながら、予型論的方法を試みる[51]。

1. ホセア書 11 章の文脈

ホセア書全体は次のような内容となる。初めに「主の命令とホセアの実践と預言」（1:1–3:5）においては、主の命令（1:2; 2:1; 3:1）、イスラエルに対する裁き（1:3–9; 2:2–13; [3:2–4]）、イスラエルの回復（1:10–11; 2:14–23; 3:5）が繰り

[51] Beale, “THE USE OF HOSEA 11:1,” 699.

返し語られる。次に「ホセアを通しての糾弾と回復の預言」（4:1–13:16）においては、罪の糾弾と裁きの宣告（4:1–10:15）がなされた後、イスラエルのこれまでの歩みと回復の預言（11:1–11）がなされ、再度 4–10 章同様、罪の糾弾と裁きが語られる（11:12–13:16）が、特にそれは北イスラエルに対するものであった。そして最後に「悔い改めと回復の宣言」（14:1–9）がなされる[52]。

そのようなホセア書の中で、ホセア書 11 章 1–11 節のアウトラインは以下のようになる[53]。

（1）出エジプトにおける救い（11:1）
（2）イスラエルの背信（11:2）
（3）背信の中にあっても貫かれる主の愛（11:3–4）
（4）現在のイスラエルの背信と頑さ（11:5–7）
（5）主のあわれみと救いの宣言（11:8–9）
（6）回復の預言（11:10–11）

このように、ホセア書全体がイスラエルに対する糾弾/裁きと回復、すなわち救いの約束を繰り返し語る中、11 章においても同様のことが語られる。特に 8–9 節においてイスラエルに対する神のあわれみゆえに裁きが絶対的ではないということが語られた後、10–11 節において将来的なイスラエルの回復が語られる。このように、ホセア書 11 章はホセア書全体の中でも重要な位置を占めているように思われる。特にそのホセア書 11 章において、以下の 10–11 節の将来的な救いの預言が記されている点が注目される。

ホセア書 11 章 10–11 節

10 彼らは主のあとについて来る。主は獅子のように（כְּאַרְיֵה）ほえる。
まことに、主がほえると、子らは西から震えながらやって来る。
11 彼らは鳥のようにエジプトから（מִמִּצְרַיִם）、鳩のようにアッシリヤ

[52] 野口彩夏「ホセア書 11 章 8 節から 9 節における קָדוֹשׁ の理解」(聖書宣教会聖書神学舎卒業論文、2015 年）5–7 頁を参照。
[53] 同掲書、7–8 頁。Cf. Beale, “THE USE OF HOSEA 11:1,” 700.

の地から、震えながらやって来る。わたしは、彼らを自分たちの家に住ませよう。
—主の御告げ—

そして、特にホセア書 11 章 10–11 節の中に見られる「獅子のように」と「エジプトから」という表現が、以下の民数記 23 章と 24 章の中に見られる表現と比べられる点が注目される[54]。

民数記 23 章、24 章

23 章 22 節
彼らをエジプトから（מִמִּצְרַיִם）連れ出した神は、彼らにとっては野牛の角のようだ。

23 章 24 節
見よ。この民は雌獅子のように（כְּלָבִיא）起き、雄獅子のように（כַּאֲרִי）立ち上がり、獲物を食らい、殺したものの血を飲むまでは休まない。

24 章 8 節
彼をエジプトから（מִמִּצְרַיִם）連れ出した神は、彼にとっては野牛の角のようだ。
彼はおのれの敵の国々を食い尽くし、彼らの骨を砕き、彼らの矢を粉々にする。

24 章 9 節
雄獅子のように（כַּאֲרִי）、また雌獅子のように（כְּלָבִיא）、彼はうずくまり、身を横たえる。
だれがこれを起こすことができよう。
あなたを祝福する者は祝福され、あなたをのろう者はのろわれる。

民数記では「雄獅子」、「雌獅子」が登場するが、いずれにしても興味深いことに、民数記 23 章ではエジプトから出て来た民（「彼らをエジプトから連れ出した神は」；「この民は雌獅子のように起き」）が「獅子」と比べられ、民数記 24 章ではエジプトから出て来た王（「彼をエジプトから連れ出した神は」；「彼はうずくまり、身を横たえる」）が「獅子」と比べられる。

さらに、民数記 24 章 9 節は以下の創世記 49 章 9 節におけるユダから起こるやがての王の預言とも比べられるのではないかと考えられる[55]。

創世記 49 章 9 節
ユダは獅子（אַרְיֵה）の子。
わが子よ。あなたは獲物によって成長する。
雄獅子のように（כְּאַרְיֵה）、また雌獅子のように（כְּלָבִיא）、
彼はうずくまり、身を伏せる。
だれがこれを起こすことができようか。

つまり、民数記 24 章 7–9 節の預言が創世記 49 章 9 節を反映することによって、ユダから起こる将来的な王の預言を描いていることにもなりうる。ゆえに、民数記 24 章では以下のように、ダビデ的メシヤニズムの要素を含んだ預言につながっていく[56]。

民数記 24 章 17 節
私は見る。しかし今ではない。
私は見つめる。しかし間近ではない。
ヤコブから一つの星が上り、
イスラエルから一本の杖が起こり、
モアブのこめかみと、
すべての騒ぎ立つ者の脳天を打ち砕く。

このように見てくる時に、創世記 49 章 9 節、民数記 23 章 22、24 節、24 章

[54] Beale, “THE USE OF HOSEA 11:1,” 700-703; Blomberg, “Matthew,” 8.

[55] Beale, “THE USE OF HOSEA 11:1,” 701.

[56] ダビデ的メシヤニズム、特にサムエル記第二 23 章 2–3 節と民数記 24 章 2–3 節の関係については、Y. Miura, *David in Luke-Acts*, 16-17 を参照のこと。

8–9 節、そしてホセア書 11 章 10–11 節の預言が、将来的なイスラエルの王という文脈において何かしら関連していると見ることができるのではないか。ホセア書 11 章 10 節の「主」とは、終わりの日のイスラエルの捕囚からの帰還を導く「王」だと言えるのではないか。それは以下のように、ホセア書における他の箇所、特に将来的なイスラエルの回復の預言の箇所における内容とも一致する。

ホセア書 1 章 11 節
ユダの人々とイスラエルの人々は、一つに集められ、彼らは、ひとりのかしらを立てて、国々から上って来る。……
ホセア書 3 章 5 節
その後、イスラエル人は帰って来て、彼らの神、主と、彼らの王ダビデを尋ね求め、終わりの日に、おののきながら主とその恵みに来よう。

ホセア書で描かれる将来の出エジプトを導くのは、やはりダビデ的王なのである。その王がホセア書 11 章で「獅子」に比べられ、しかし民数記 23 章、24 章ではその「獅子」はイスラエル、そしてまたイスラエルを導く者（創世 49:9 参照）として指し示されていたということになる[57]。

2．マタイの福音書 2 章 15 節におけるホセア書 11 章 1 節の引用理解

Beal は、ホセアが民数記に示されているような「過去の出エジプト」と「獅子のイメージ」が将来的に再度起こる出来事と見ていたのではないかと考える。ゆえに、ホセア書 11 章は「出エジプト」で始まり、再度「出エジプト」で終わる。Beale は、「イスラエルの歴史の最初である第一の出エジプト（ホセア 11:1）のパターンが、終わりの日にイスラエルの歴史の最後に再度繰り返される」と言う[58]。このホセアの視点を実はマタイも知っていたのではないか

[57] Beale, “THE USE OF HOSEA 11:1,” 700-702.
[58] Ibid., 703.

と考えられる。Beale はここで Richard B. Gaffin のコメントを引用する[59]。

「ホセア書 11 章を、神がその民のために働く際に（これまで見られた）パターンに従われるのだとホセアもまた信じていたと理解する以外には考えられない。エジプトにおいて奴隷であったことが外国の地（5 節）における第二の奴隷状態の時のパターンであり、出エジプトが新しい出エジプト（10–11 節）のパターンである。このように、（マタイによる）ホセア書 11 章 1 節に対する予型論的な原則の適用は、実はその預言それ自体の性質とホセア自身の方法と軌を一にしている。」

予型論的な解釈だとしても特に Beale が強調することは、「イスラエルの歴史の最初である第一の出エジプト（ホセア 11:1）のパターンが、終わりの日にイスラエルの歴史の最後に再度繰り返される」ということを、マタイという前にホセア自身がすでに知っていたのではないかというのである。つまりは、マタイは特にホセア書 11 章に潜んでいるホセアの理解を知った上でホセア書 11 章 1 節を引用しているのではないかと言うのである[60]。

マタイはホセアが言うところの「子」としてのイスラエル（ホセア 11:1）と「子」としてのイエス（マタイ 2:15）を対比する。実際はイスラエルが成し遂げるべきであったが成し遂げられなかったことをイエスが成し遂げる[61]。過去にイスラエルがエジプトから帰って来たように、マタイは終わりの日にエジプトから帰って来たイエスを新しい出エジプトを開始する者として描くのではないかと思われる[62]。

[59] R. B. Gaffin, “The Redemptive-Historical View,” in *Biblical Hermeneutics: Five Views*, eds. S. E. Porter and B. M. Stovell; Downers Grove: InterVarsity, 2012), 106-108, cited by Beale, “THE USE OF HOSEA 11:1,” 705. 他にも、T. L. Howard, “The Use of Hosea in Matthew 2:15: An Alternative Solution,” *BSac* 143 (1986) , 324 も参照のこと。
[60] Beale, “THE USE OF HOSEA 11:1,” 710-711.
[61] Ibid., 710.
[62] Cf. Howard, “The Use of Hosea,” 321-322.

IV. 結

Peter Enns などは、マタイの福音書2章15節におけるホセア書11章1節の引用問題を例にして「使徒たちの聖書解釈法はいわゆる歴史的・文法的解釈からは導かれない」と結論づけ、そしてさらにその結論を我々の今日的な釈義方法の問題にまで発展させ、適用しようとする。旧約聖書から新約聖書への連続性、つまりは prospective な方向性を認めず、単に新約聖書から旧約聖書への retrospective な方向性しか認めない、旧約聖書の再解釈となる。ゆえに、Enns の主張は、これまで「歴史的・文法的釈義」と呼ばれる方法論を用いてきた福音主義聖書学にとってのチャレンジとなっていた。

そのチャレンジは、もしかすれば主に Kaiser が主張するような先行テキスト（旧約）から後続テキスト（新約）への一方向性のみの理解しか認めない立場、つまりは旧約聖書著者の意図した意味と新約聖書著者の意図した意味が全く同じだと言う立場に対してだったのかもしれない。Kaiser はマタイの福音書2章におけるホセア書11章1節の引用に対しても、結局はホセアは11章1節で将来のメシヤに対する直接的な預言をしていると見る。そのような理解に対する限界は確かにあるのかもしれない。

しかしだからと言って、筆者はすぐに Enns の立場でなくてはならないとは思わない。Bock は、旧約聖書著者から新約聖書著者に伝わる意味を “Single Meaning” と表す。Kaiser と立場を同じくし、Enns とは立場を異にする点である。旧約聖書から新約聖書への prospective な方向性を絶対的に認める。マタイの福音書2章におけるホセア書11章1節の引用に際しては Beale は「イスラエルの歴史の最初である第一の出エジプトのパターンが、終わりの日にイスラエルの歴史の最後に再度繰り返される」ということ、すなわち予型論的な理解をマタイという前にホセア自身がすでに持っていたのではないかとさえ言う。ホセア書のみならず旧約聖書全体の文脈（例えばイザヤ書等）に通じる深い理解がホセア自身にあったのではないか。そして、イエス・キリストの救いの出来事を記録するマタイは、さらにそのようなホセアの理解にも通じており、そしてマタイ自身も旧約聖書全体に対する深い理解を持った者としてホセア書11章1節を用いたのではないか。やはり、マタイ自身も「イスラエルの歴史

の最初である第一の出エジプトのパターンが、終わりの日にイスラエルの歴史の最後に再度繰り返される」ということを予型論的に理解したのではないか。出エジプトに関する予型論的理解は新約聖書全体に見られるものだと考えられるからである[63]。

Enns の主張は主に後続テキスト（新約）から先行テキスト（旧約）への retrospective な方向性のみを強調しているように聞こえるが、むしろ新約聖書における旧約聖書引用問題に対しては prospective な方向性（先行テキスト→後続テキスト）と retrospective な方向性（後続テキスト→先行テキスト）の両方の方向性の理解が必要なのではないか。つまりは、これまでも福音主義者たちの多くは Bock や Beale の表現を借りるならば「神学的・正典的読み方」（“theological-canonical reading”）/「聖書的・神学的アプローチ」（“biblical-theological approach”）を含んだところの歴史的・文法的釈義に沿ってテキストを理解してきたのであり、これからもその方向性の中で歩むことができるのではないかと思われる。

マタイの福音書2章におけるホセア書11章1節の引用理解に関しては、Enns の最終的な理解は旧約テキストの広い文脈を考慮した上での予型論的な理解に近いものであった。そのこと自体、やはりそうでなければこのようなテキストは理解できないということを示しているのかもしれない。しかしそれは逆を言えば、Enns のような方法論を取る必要がないということでもあると思える。やはり、まずは旧約聖書著者の伝えようとする一つの意味が新約聖書著者にも伝わり、そして究極的な著者である神が新約聖書においてその意味を完全に表されたのではないかと考える。

（横浜山手キリスト教会牧師・聖書宣教会聖書神学舎教師）

---

[63] 例えば、R. E. Watts, *Isaiah's New Exodus in Mark* (Mohr Siebeck, 1997, reprint, Baker Academic, 2000); D. W. Pao, *Acts and the Isaianic New Exodus* (J. C. B. Mohr, 2000, reprint, Baker Academic, 2002) を参考のこと。